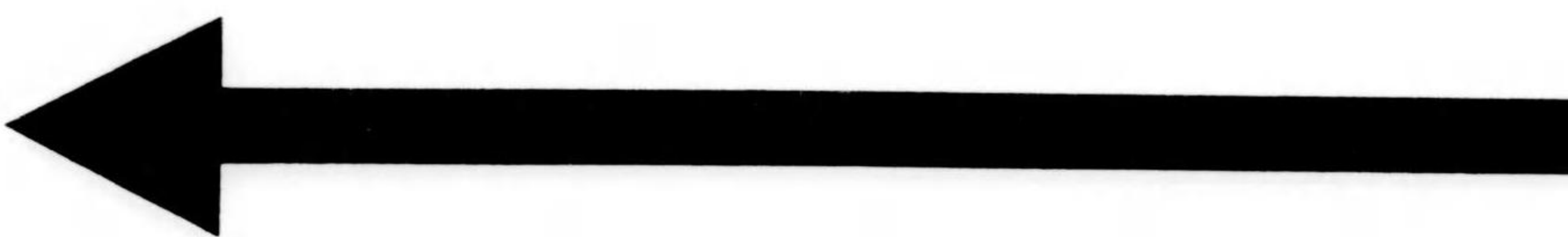




特

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 <sup>19</sup>/<sub>70</sub> 1 2 3 4 5

始



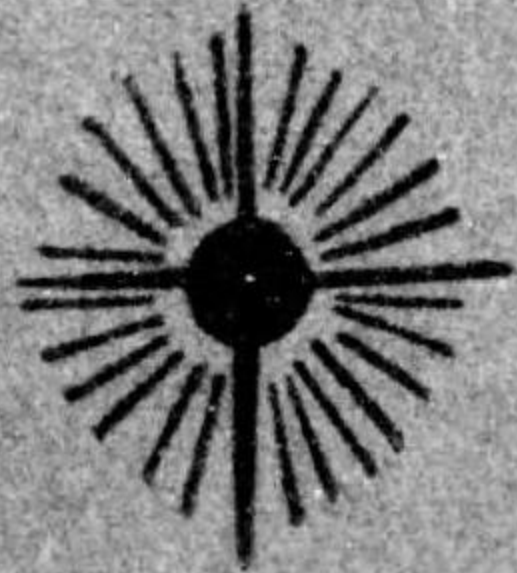
編夫一藤加

書叢人般一

編一第

りあ亦申に處るあ愛

イトスルト



版堂陽洛



特

持104  
50

科104  
50

書叢人般一

編夫一藤加

編一第

りあ神に處るあ愛

作イトスルト

譯夫一藤加



版堂陽洛

大正

5. 2. 14

内交

## 序

一般人叢書を出さうと思ひ出してからもう半年以上になる。たゞ色々の事情からしてこれを實行することが出来なかつた。事情と云つても重なる事情は言ふまでもなく經濟上の事である、無一文な自分には僅か百頁内外の書物を刊行するさへ容易でない。而も此の計劃は既に發表してしまつて居る(最初此れ位のこととはわけもなく出来ると思ひ誤つたので)多くの讀者から切りに督促や賛成の手紙が来る。そこで思ひ切つて妻の着物を質に入れたり本屋から印税の都合をしてもらつたり、色々のことをして兎に角第一篇を出すことになつた。しかし本だけは出来たが、廣

告をすることも出来ねば賣捌くことも出来ない。そこで自分は此の計劃を洛陽堂主人河本龜之助氏にはかつた。常に良い本をわが讀書界に提供せんことを欲して居る同氏は非常に此の舉に賛成してこれを引きつゞき同氏の手で出版してくれることになった。自分はこれを深く喜ぶものである。

何故自分はそれ程にまでしてこれを出さねばならぬか。約束があるからか？ それもある。しかし何よりも深い理由は眞の藝術をわが國民一般にさゝげたいからである。今の多くの藝術はあつた。一部の人々にのみ解る、ある一部の人々の神経にのみ觸れることの出来る、そして人間の本然性から遠かり、それを<sup>ハイライト</sup>狂屈した畸形的藝術に過ぎない。永遠的な眞實性がそこにない。一般民衆の

うちに秘むで居る尊い永遠性や實在性や生々しい美はしい感情を喚び起す様な藝術がない。それを一般人に献げたい。これを成すことが出来ない様では藝術家とは云へない。

自分が一般人叢書を出すのは決して通俗藝術を出して澤山賣つて澤山儲けやうと云ふ考へからしたのではない。低級な好奇心や慾念に迎合せんとする本なら毎日毎月數へきれない程澤山に出る。自分達は少しもそんな商賣人と競争するつもりはない。一般人叢書とは普通一般人の内心に秘むで居る共通のある美しい善いものを掘り出し培ひ、はぐみ育てやうとする意味に於いてである。

さう云ふ自分達の藝術を提供したい。併し自分達の力はまだ

足りない。そこで先づ、さう云ふ意味で書いた最も善い最も代表的な人をして『余はこれ等を(トルストイのこれ等の短篇)を嘗つて書かれたる最も完全なる物語りなりと思惟す』と感嘆せしめ、『最高の藝術は提供されたり、ダント、ジエクスピア及び聖書の如く、そは不朽に残さるべし、何となればこゝに永遠の眞理は存すればなり』『若しトルストイにしてこれ等の短篇の外何物をも書かざりしとするとも、彼は尙ほ世の最も偉大なる人々の間に伍せらるべし』と推賞せしめたるトルストイの物語を選ぶことにした。

今やこれ等の物語は全世界の各國語に譯され、既に幾百萬幾千萬部を賣り盡くしたかわからない。これ程の普遍性を有して居る不朽の藝術をわが一般同胞に提供せんとするのは意味のない

事であらうか。

眞の生命の糧に飢えたわが敬愛する一般民衆よ、年はまさに更まつて、新生の氣を諸君のうちに湧きたゞして居る。この小さな書は自分から諸君への微さき好意のしるしまでの贈物である。これが諸君の心霊に、また家庭に、また社會に、何等かのよき音づれをもたらして行く見えざる天使であらんことを衷心より希求しつゝ、自分は此の序文を書く。

鶴山の寓居にて

編者

千九百十七年一月

## 愛のあるところに神あり

マルチン・アザデキチと云ふ靴屋がある町に住んでゐた。彼は半分は街の地下になつてゐる小さな室に住んでゐた、その室には往來に向いてあいて居る一つの窓があつた。この窓から彼は往來の者を眺めた。見えるのは足だけであつたけれど、マルチンはその長靴で誰だか分つた。彼は此の同じ室に長年住んでゐたので大勢の人を知つてゐた。この界限で一度か二度彼の手にかゝらない長



靴は一つもないと云つていゝ位であつた。或物は底を張りかへたし、或物は補片をあてたり修理をしたし、また或物は新らしい飾りをつけてやつた。窓越しに彼は、自分の細工をよく見ることができた。彼は仕事が上手で、良い革を使つて、おまけに値段が安くて約束を守つたので仕事が澤山あつた。若し期日までに仕上げる事ができれば彼はそれを引受けた。若しできなければ彼は正直に云つて決してだまさうなどとはしなかつた。だから誰でも彼を知つてゐたので彼は決して仕事がないなんて云ふやうなことはなかつた。

マルチンは何時もいゝ人であつた。然し年を取つて來るに従つて彼は自分の靈魂のことを餘計に考へるやうになつて、一層神に近よつて行つた。彼がまだ年期のあけなない内に、彼の妻は三つになる男の子を残して死んで了つた。ほかの子供は何れも生きてゐなかつた。皆な赤坊のうちに死んで了つたのであ

る。最初マルチンは彼の小さい子を田舎にゐる妹の所へやらうと思つたけれども後で子供が可哀相になつた。彼は考へた。

『カピトン坊もよその家で育つのは辛からう。まあわしの傍へ置いてやるとせう。』

マルチンは親方の所から出て子供と一所に此の小さい室へ入つて住んだのであつた。然し彼はどうも子供に縁がなかつたらしかつた。恰度親爺のたのしみにしてゐた子供が大きくなつて手助けをさせた時は、病氣にとりつかれた。一週の間熱で苦しんだ揚句到頭死んで了つた。マルチンは息子を葬つて、すっかり力を落して了つた。彼は落膽の餘り神を恨んだ程であつた。彼は死を願つた。そしてたつた一人の可愛い子の代りに、もう年寄の自分を連れて行かなかつたと云つて神を責めた、それほど彼は身も世もなく悲しんだ。マルチンは教

會へ行かなくなつて了つた。

ある日のことマルチンと同じ村の爺さんが彼を訪ねて來た。彼はこの八年間巡禮に出てゐたので、トロイツア院からの歸途であつた。マルチンは自分の身の上を語つて、胸の悲しみを懃へた。

「わしはもう些共生きたいとは思ひませんよ、」と靴屋は云つた。「わしはたゞ早く死にたいと思ふばかりです。わしの願ひはこのことばかりです。いまはもうわしは何の望みもない人間ですからね。」

「お前さんの云ふ所はそりや少し間違ひだよ、マルチンさん。」とその爺さんは云つた。「わしらあ神様の仕事を審いちやならない。わしらの理屈じやなく、神様の審きに依らなければならぬよ。神様はお前さんの息子さんが死んで、お前さんが生きるやうにお定めになつたんだ。だから斯うなるのがいゝに違ひない

よ。お前さんが落膽かつかなされるのは、そらあお前さんがたゞ自分だけの幸福のために生きやうと思ふからだよ。」

「そんなら何のために生きてらいくんだらう？」とマルチンは訊いた。爺さんは云つた。

「神様のために生きなさいやならないよ、マルチンさん。神様はお前さんに命をお授けになつたんだ。だからお前さんは神様のために生きなさいやならないんだよ。お前さんが神様のために生きれば、お前さんは何にも嘆くことなんかなくなつて、みんなお前さんに取つて樂になつて見えるよ。」

マルチンは暫く黙つてゐた。そして訊いた、

「神様のために生きるのには如何すればいゝんだらう？」  
爺さんは云つた、

「何うすれば神様のために生きられるか基督様が教へ下すつた。お前さん讀むことが出来るかい？ そんなら聖書を買つてお讀みなさいな。神様のために生きるには如何すればいいか分るからね。そのなかに皆な説き示されてあるからね。」

これらの言葉がマルチンの心の腑に落ちた。その日に彼は出て行つて大きな文字の聖書を買つた。そしてそれを讀み出した。

最初彼はたゞ休みの日だけに讀まうと思つたのだけれど、讀み始めるとその言葉は彼を大變幸福に思はせたので、到頭彼は毎日讀むやうになつて了つた。どうかすると彼は餘り夢中になつて了つて、洋燈の中の油がすつかり燃え盡して了ふやうなこともあつた。それでも未だ彼は書物を手放すことができなかった。斯うしてマルチンは每晚讀み始めた。讀めば讀むほど、益々彼は神が何を

彼に求め、如何すれば神のために生きられるかを會得した。そして益々幸福に満足になつて來た。以前は寢床へ行く時、彼は何時も横になつて嘆息したり、呻つたり、小さいカビトンのことを考へたりばかりしてゐたのだ。それがいまはたゞ斯う云ふだけになつた、

『神に榮光あれ、神に榮光あれ！ 汝の御心のならんことを！』

その時以來マルチンの生活はすつかり變つて了つた。以前休日には、彼は吃度酒場へ入つて茶を飲む慣はしであつた。如何かするとまた火酒一抔位はやりかねなかつた。彼は友達と一所に飲んで、そんなに酔拂ふやうなことはなかつたけれども、何方かと云ふと一抔機嫌になつて、馬鹿を云つたり人と罵り喚めき合つた。いまは彼はそんなことをすつかり止めて了つて、彼の生活は平和な歡ばしいものとなつた。朝彼は仕事に着く、そして仕事の時間が終はると彼は

鈎から洋燈を外して、それを卓子の上へ置いて、さて棚から書物を取り出して開ける、そして腰を落ち着けて読み出すのであつた。讀めば讀むほど、彼はよく領會もし、益々明るく、快活にもなつて行くのであつた。

ある日のことマルチンは夜遅くまで座つて讀んでゐた。彼は路加傳の第六章を讀んで、次の節にぶつかつた、

『人なんぢの頬の片へを撃たば、亦かたへの頬を向けよ。爾の外衣をとるものには、亦裏衣をも拒まざれ。すべて爾に求むるものには之を與へよ。爾の物を取るものには、其をまた索むるなかれ。おのれの人にせられんと欲することを亦人にもその如くせよ。』

彼は次の節も讀む、其所でイエスは斯う云つてゐるのである。

『爾曹わが言を行はずして、何ぞ我を主よ主よと稱ふるや。すべて我に就り、

我が言を聞いて行ふ者を譬へて爾曹に示さん。その人は家を建つるに土を深く掘りて、基礎を磐の上に置けるが如し。洪水のとき、横流その家をうつとも動かすこと能はず、これ基礎を磐の上に置けばなり。聽きて行はざる者は基礎なく家をこの上に建てたる人の如し。横流これをうつときは、その家直ちに倒れ、その頽壞また甚し。』

マルチンがこれらの言葉を讀んだときに、彼の靈魂は歡びに満たされた。彼は眼鏡をはづして、それを本の上に置いて、卓子の上に兩脇をついて、深い考へに耽つた。彼はいま讀んだ言葉で自分の生涯を顧みたのである。

『わしの家はどうか云ふ風に建てられてるか——磐の上だらうか、または砂の上だらうか?』と彼は考へた。『磐の上なら、結構だ。けれどもこゝに一人きりで座つてゐれば、皆な譯はないことだ、お前はほんとに凡てのことを神様の仰せ

の通りやつてゐるやうに思はれるが、然しそれを忘れる時には、お前はまたもや罪を犯すんだだ。がわしはもつと努めやう。わしは大變幸福だ。主よ、私をお助け下さい」

彼は何時もの寝る時間を疾うに過ぎて了つたまで考へてゐたが、それでも未だ本を手放さなかつた。彼は第七章を始めた。彼は百人の長と寡婦の息子のこつとや、ヨハネの弟子達に與へた答へを續んで、基督を自分の家へ招待した富めるパリサイ人の話の處へ來た。彼は如何に罪人であつた婦が彼の足に香油を注いで涙でそれを洗つたか、そして如何に彼が彼女を赦したかを讀んだ。彼は十四節へ來た。そして讀んだ、

「遂に婦を顧みてシモンに曰ひけるは、この婦を見るか、我なんぢの家に入るに、爾は我が足に水を與へず。この婦は涙にてわが足を濡ほし、かしらの髪も

て拭へり。爾は我に吻接をせず。この婦は我此處に入りし時より、我が足に吻を接けてやまず。爾は我がかしらに膏をぬらず。この婦は我が足に香膏を抹れり。」

「爾は我が足に水を與へず。」マルチンは繰返して見た。「爾は我に吻接をせず。爾はわが首に膏を抹らず。」

マルチンは眼鏡を外して、それを本の上に置いて、もう一度考へに耽つた。

「恰度わしのやうなパリサイ人だなあ！、わしのやうに、その男はたゞ自分だけのことを考へたのだ——如何してお茶を飲んだり、暖かに安樂に寝られるかを考へて決して客人のことなどは考へもしなかつた。自分だけが大切で、客人などは如何でもよかつたんだ。そして客人と云ふのは主御自身だつたんだよ。若し主が私をお訪ね下さつたら、私も同じことをしなさいならなかつたんだら

うか？」

マルチンは諸手に頭をあづけて、何時の間にかぐつすり寝込んで了つた。不意と何物か彼の耳に叫いてゐるやうな気がした——

「マルチン！」

斯うそれは叫いた。

マルチンは眠りから醒めた。

「誰だい？」と彼は訊いた。彼は振返つて戸口の方を見た——誰もそこにゐなかつた。また彼はとろとろした。と、不意にまた可成はつきりした聲が聞えた。

「マルチン！マルチン！明日往來を見よ、私が来る。」

マルチンは再び眼が醒めて、椅子から起きた。そして眼をこすつたけれど、

本當にその言葉を聞いたのか、またはたゞ夢みたゞけなのかはつきりしなかつた。で洋燈を消して床へ入つた。

翌朝早く起きて、神様にお祈を上げてから、ストオヴを焚いて、玉菜の汁と麥粥を拵へ、そしてサモヅルに水を注いで火にかけた。そして前掛をかけて窓際に仕事を始めた。

仕事の間、彼の考へは昨夜あつたことばかりに走つた。彼は幾度も考へたけれども、その聲を夢で見たのだから、或は本當に聞いたのだから如何しても分らなかつた。彼は自分に云つて見た。

「さう云ふことがあつたんだ。」

斯うして彼は考へながら窓際に座つてゐた。そして一日仕事するよりも餘計に往來を眺めて、見なれない長靴で行く者がある度毎に、足と同じやうに顔を

見やうと思つて、彼は身を屈めて窓越しに往來をのぞき上げた。門番が新らしいフェルトの長靴を穿いて通つた。水汲みが通つた。ニコラス一世陛下の時代の老兵が補片つぎのあてたフェルトの長靴を穿いて、鋤を手にして行つた。マルチンは長靴でその誰だかわかつた。彼の名はステフェンと云つて、近所の商人の家にゐるが、その商人は慈善の心から彼に宿を興へてゐるのであつた。彼の職業は門番の手傳ひをすることであつた。彼はマルチンの家の窓邊の雪を掃除し始めた。マルチンは彼を見上げたが、また仕事を精出して行つた。

14

「俺もこの年になつて氣狂ひになるのかな。」と彼は考へた。「ステフェンは雪掃除をしてゐる、俺は基督様のいらつしやるのを待つてゐる。俺もぼけたなあ！」

彼はもう二針三針縫つたが、またステフェンを見たくなつた。彼は外を見

た。ステフェンは鋤を壁にたてかけて、休んで、體を暖めやうとしてゐた。彼は大變年が寄つてよぼよぼなので、もう雪をかく力がないやうな様子だつた。マルチンは考へた、

「茶でも御馳走しやうかな。そらさうと、サモヴルも沸き出したぞ。」

彼は六針を仕事物に突刺して、立上つた。そしてサモヴルを卓子の上に置いて、茶を入れて窓を叩いた。ステフェンは振返つて窓の方へやつて來た。彼は云つた。

15

「入つておあたりよ、寒いだらう。」

「有難う！」とステフェンは云つた、「まつたく骨がずきずきするよ。」

彼は入つて來て、雪を振つた。そして床を汚すまいと思つて足を拭いたけれども、すつかりへとへとになつてゐたので、さうしながらよろけた。マルチン

は云つた、

「足なんか拭かないだつていゝよ。わしが床を拭くからね。それは私の仕事だもの。まあ座つてお茶でもお上り。」

マルチンはお茶を二杯注いで一つを客にすゝめた。自分の分はそれを小皿に明けて吹いた。

ステフェンは自分のお茶を飲み干して、茶碗を伏せて、その上へ残りの砂糖の塊を入れてマルチンにお禮を云ひ出した。けれども彼がもつと欲しいのは明かであつた。

「もう一杯お上りな。」

マルチンは更めて二杯注ぎながら云つた。彼は飲みながら再三窓の方へ眼をやつた。

「誰かを待つてるのかい？」と客は訊いた。

「ふむ、誰を待つてるか云ふのもお恥しい程なんだよ。それにわしは本當に誰かを待つてゐるんだとも云へない人だ。だけどある言葉が私の心に入つたんだよ。それが幻だか、本當に私が見た人だか、それは分らない。まあ斯うなんだよ、お前さん。昨夜わしは主イエス、キリスト様のことを書いた聖書を読んでゐたんだ。基督様が人間の間に生活してお苦しみなさつたことが書いてあるんだよ。お前さんも大方その話は聞いてるだらうね。」

ステフェンは云つた。

「あゝ、私も聞いてるよ。けれども私は無學の男だからね。私には讀めないやね。」

「でね、お前さん、わしはあの方とあの方がこの地上でお住まいなさつたこと



を讀んでゐたんだよ。わしはあの方がパリサイ人の所へおいでになつたことや、パリサイ人が些共おもてなしをしなかつたことを讀んだんだ。讀んでゐてわしは考へたんだ、如何してこの男は主基督様にそんな悪いおもてなしができるんだらう？、わしはまづ考へたよ、若し萬一そんなことが私にあつたとしたら、私はとても十分なおもてなしをし申す術を知らないだらうとね。然しパリサイ人は何もして上げ申さなかつたんだよ！、で、考へてゐると、私はぐつすり寝ちやつたのさ。そして寢てゐる時に誰かわしの名を呼ぶ聲がしたんだ。起きて見ると、何だか小さな聲で、「私を待て、私は明日来る、」云ふのが聞えるんだ。二度さう云つたんだよ。そしてそれが、お前、私の心に入つて了つて、自分で自分を叱つて見ても、何うしてもその人を待たないではゐられないのさ。」

ステフェンは頭を振つたが、何にも云はなかつた。彼は茶碗を干して伏せたけれども、マルチンはそれを起して再び注いでやつた。

「十分お飲みよ。ねえ、わしは主が我々人間の間にお住ひになつた時には誰もお蔑みになりはしなかつたことを考へてゐたんだ。あの方は大概平民にお説教なさり、大概貧乏な者共とお歩きになり、お弟子を我等と同じ罪人の兄弟、労働者の内からお選びになつた。あの方は斯う仰せられた。凡そ自らを高くする者は卑くせられ、自らを卑くする者は高くせられん。また斯う仰せられた、なんぢら我を主とよぶと。それからまた、われ爾曹の足を濯ふと仰せられた。また、なんぢらのうち首たらんと思ふ者は爾曹の僕となる可しと仰せられた。そは、貧しき者、遜る者、柔和なる者、あはれみある者は幸なるかなと仰せられたんだよ。」

ステフェンはお茶なんぞ忘れて了つた。彼はもう老人で、涙脆かつた。そこ

に座つて聽いてゐると、涙がぼろぼろ顔に流れた。

『さあ、もちつとお飲みよ、』とマルチンは云つた。

だけれどステフェンは十字を切つて、お禮をのべて、そして茶碗を押しやつて立上つた。

『有難う、マルチン、アヴデキチさん、』斯う彼は云つた、『お前さんは御馳走して慰めて下さつた、からだ體にもたましひ靈にもね。』

『よく來て呉れたね、』マルチンは云つた、『また來てお呉れ、わしはお客の來て呉れるのが嬉しいんだ。』

ステフェンは歸つて行つた。マルチンは残つた茶を注いで、それを飲んだ。そして皿を押しやつて再び窓邊に座つて仕事を始めた。そして縫ひながら、彼は幾度も幾度も窓の方を眺めた——基督の來るのを待つて、彼のすること、彼の仕

事の事とを考へながら。そして彼の心は基督の言葉で一抔になつてゐた。

二人の兵隊が通つた。一人はお上の長靴を穿いて、一人は彼の拵へたものを穿いてゐた。それから隣家の主人がびかびかした木靴を穿いて通つた。それから麵麩屋が籃を持つて通つた。皆通り過ぎて了つた。すると毛の靴下の田舎染みた靴を穿いた女が通つた。彼女も通り過ぎて行つたが、窓闕の傍で立止まつた。マルチンは窓からのぞき上げた。彼女は見知らない人で、貧しい態をしてゐて赤坊を連れてゐた。彼女は壁の所に立つて風に背を向けてゐた。彼女は子供を蔽はうとしてゐただけけれども、何にも蔽ふ物がなかつたのだ。着物は夏物で、貧しく、古びてゐた。そして窓越しに赤坊の泣聲と、女がだましてゐるのことがマルチンに聞えた。然し赤坊は中々泣き止まなかつた。マルチンは立つて、戸を開けて、石段の所へ出て行つて呼んだ、

「おい、お上さん、おい」

女は彼の聲を聞いて振返つた。

「赤坊を抱いて、何だつてそんな寒い所に立つてゐるの？ さあお入り。暖い所でよくいたわつておやり。さあお入りよ。」

女はこの言葉にびつくりしたけれど、前掛を締め眼鏡をかけたお爺さんが呼びこんでゐるのを見て、後からついて行つた。

彼等は石段を下りてその小さい室に入つた。マルチンは女を寢床へ連れて行つた。そして云つた、

「そら、そこへお座り、ストオヴの傍へね。暖まつて坊やにお乳をお上げ？」

「お乳がないんです、」と女は云つた。「私は今朝から何も食べないんです。」それでも彼女は子供を胸に押しあてた。

マルチンは頭を振つた。そして皿と麵麩の塊を持つて来て、窓の戸を開けてそれから皿に玉菜の汁をつけてやつた。それから彼はお粥の鍋の方へ行つたけれども、それは未だ出来てゐなかつたので、彼は汁だけを卓子の上へ置いた。そして麵麩を切つて、釘から片をはづしてそれを卓子の上に敷いた。彼は云つた。

「座つてお食べ。小さいのはわしが見てあげやう。わしも子供を育てたことがあるから、面倒見る術を知つてゐるんだよ。」

女は十字を切つてから、卓子に着いて食べ始めた、そしてマルチンは寢床に赤坊の傍へ座つた。彼は赤坊に唇を鳴らして見せやうとしたけれど、まるで齒がないので上手に出来なかつた。それで子供は矢張り鳴き止まなかつた。でマルチンは指でおどす真似をしてあやさうとして見た。彼はそれを子供の前で

振つて、つとその口の所へ持つて行つたが、やがてまた急にそれをひつこませた。彼は子供に指を吸はせるのを恐れた、と云ふのは臘で眞黒になつてゐたので。子供はその指を何時までも見てゐた。そして遂々泣き止んで、笑ひ出した。マルチンはよろこんだ。

その間女は食べてゐた。そして凡てのこと自分の身の上や住まひのことをマルチンに話した。

『私は兵隊の女房なんです、』斯う彼女は云つた、『夫は八ヶ月前何處か大變遠い所へやられて、それきり何の便りもないんです。私はコツクの奉公をしてゐたのですけれど、間もなく赤坊が生れたんで、子持の私を置いては呉れませんでした。それで私はこの三月の間口がなくなつて苦勞して來たのです。持物はみんな賣つて食べて了ひました。乳母にでも雇つて貰はうと思ひましたけれども、

誰も雇つては呉れません。皆な私が餘り瘦せてゐると云ふのです。今もある商人のお上さんの所へ行つて來たのです。そこに私と同じ村の女が奉公してゐて私を雇つて呉れると約束したのです。私は直ぐにも來させて呉れるだらうと思つてましたら、來週まで來てはならないと云ふのです。その人の家は随分遠いひでせう、私はもうすつかり勞れて了ひました、それに可哀相にこの子までも。でも仕合せなことには、私達の宿のお上さんが私達を憐んで、基督様の御爲だと云つてたゞで置いて下さるんです。さもないければ私達は如何して暮して行つていゝか譯が分らないんです。』

マルチンはほつと息をついた。そして云つた、

『それじゃ、あつたかい着物なんか持つてゐないのかい？』

『如何して持つてなんかゐられませう、おぢさん？昨日私はお終ひの肩掛を二

十錢で質に入れて了つたんですよ。』

聽て女は寢床へ歩いて行つて赤坊を抱いた。マルチンは立つて戸棚の方へ行つて、その中を探しまわしてゐたが古いジャケットを取り出して來た。

『さあ、彼は云つた、これは餘りいゝんじゃないがね、でも少しはくるんでやる足しにはなるだらう。』

女はジャケットを眺めた。それからマルチンを。そしてそのジャケットを受取つてわつと泣き出した。マルチンは體を返して、再び寢床の下へ這ひ込んだ。そして小さい箱を引きづり出して、暫くその中を探してゐたが、聽てのことやつて來て再び女と向ひ合せに座つた。

『神様のお恵みあれ、おぢさん、』と女は云つた、『私を貴方の窓の下へあつかはしになつたのは吃度基督様ですね。坊やは凍え死ぬ所だつたんですよ。私が出

て來た時はそれでも未だ幾らか温かだつたんですが、ひどく冷えて來ました。本當に貴方に窓の外を見るやうに、そしてこの憐れな私を憐むやうにお命じなされたのは、おぢさん、基督様に相違ありませんわね。』

マルチンは含笑んで云つた、

『然うだよ、あの方がお命じなされたのだよ。私はたゞ譯もなく窓の外を眺めてゐたんじゃないよ。』

で彼は女に彼の夢のことや、基督が今日も訪ね下されると約束する聲を聞いたことを話した。

『どんなこともないとは云へませんよ、』と女は云つた。そして立つてジャケットを着て、その中へ子供をくるんで、もう一度マルチンに心からお禮を云つた。

『基督様のお爲めだ、これをお取り。』、マルチンは斯う云つて彼女に二十錢を

與へた。「さあ行つてお前さんの肩掛を取つておいで。」

二人は一所に十字を切つた、マルチンは戸を開けてやつた。女は出て行つた。

彼女が行つて了ふと、マルチンはお汁をやつて了つて器物を片つけて、さてまた仕事に取りかゝつた。だが仕事しながら彼は窓に氣をつけることを決して忘れなかつた。暗い影がさすや否や彼はそれが誰だか見上げるのであつた。知らない人や、知つてゐる人が通つた。だが大切な人は少しも通らなかつた。遂に一人の林檎賣のお婆さんが彼の窓の直ぐ前に立止まつた。彼女は林檎の籃を持つてゐたが、その林檎はあらかた賣り盡して、たゞ少しばかり残つてゐた。

彼女は木片のつまつた袋をかついでゐた。それは吃度何處か新築の家で集めて、家へ持つて歸る處なのだ。その袋が彼女を勞れさせたのは何處から見ても分つた。と云ふのは彼女はそれを他の肩に上げるために立止つたのであつたからだ。

彼女は籃を柱の上へ置いて、袋を往來へ下ろして、木片を揺りつめ始めた。彼女が斯うしてゐる間に、襤褸帽子をかぶつた男の子が籃に馳けつけて、林檎を一つつかんで一目散に逃げ出した。お婆さんはそれを見つけて、振返つてその子の袖をつかまへた。男の子はじたばた逃げやうとしたが、お婆さんは諸手でむづとつかまへて、遂々帽子を叩き落して頭の髪をひつつかまへた。子供は悲鳴を上げた。お婆さんは怒鳴つた。マルチンは大針を卓子に突き立てる間もなく、凡てのものを抛つちやらして飛び出して行つて、せいせい段々を馳け上つた。そして眼鏡を落して了つた。彼が往來へ出た時には、お婆さんは男の子の耳をはりつけて、怒鳴りつけて、巡査に渡して了ふと脅かしてゐた。子供はじたばたしながら聲を上げて叫んでゐた。

「あたい取りやしなかつたんだ！ 何だつて撲るんだい？ 放してお呉れよ。」

マルチンは間へ馳け込んで二人を引分けた。そしてその男の子の手を取つて叫んだ、

「放しておやりな、おばさん。基督様のためだ、赦しておやりな。」

「來春まで忘れないやうに赦して呉れやう！ 警察へ引渡してやるから、畜生め！」

マルチンは再び老婆をなだめやうとした。

「放しておやりよ、おばさん、二度とはしやしないやね。放しておやり、基督様の御爲だ。」

お婆さんは放してやつた。男の子は逃げ出さうとしたが、マルチンは強固<sup>シツコク</sup>に押へてゐた。

「小母さんにおやまり、」と彼は云つた、「もう斯んなことするんじゃないよ。わ

しはお前の取るのを見てゐたんだよ。」

男の子は泣き出した。そしてお婆さんにあやまつた。

「それでいゝ。さあ林檎を一つ上げる。お取り。」マルチンは斯う云つて籃から林檎を一つ取つてそれを子供に與へた。「わしが拂ふよ、小母さん。」と彼は女に云つた。

「お前さん其んなことをして皆やくざにするんだよ、あの畜生めらを、」と女は云つた、「一週も座れないやうな目に會はしてやればいいんだ。」

「はい、小母さん、」とマルチンは云つた、「それはわし等の眼には正しいことかも知れないが、神様の眼から見ると正しくないんだよ。あの子が林檎一つ取つて答うたれるんなら、わし等の罪には何をされるんだい？」

お婆さんは黙つてゐた。

マルチンはまた大變負債のある者を赦した王様と、その負債のある人が自分に少しばかりの負債のある者を苦しめた譬話をしてやつた。お婆さんは黙つて聞いてゐた。男の子も疑乎と立つて耳を澄してゐた。

「神様はわし等に赦すやうにお命じなされるんだ、」と靴屋の爺さんは云つた。「さもないとわし等が赦されないんだ。何んな者も赦されなければならぬんだ。殊に考へのない子供はね。」

お婆さんは頭を振つて溜息した。

「然うだ。」と彼女は云つた。「それは大變結構なことだけれど、皆なを大變悪い者にして丁うだらう。」

「そんならそれを良くするのがわし等老人の務めじやないか、」とマルチンは云つた。

「そこだよ、私の云ひたいのは、」とお婆さんは云つた。「私も七人の子を有つたが、残つてゐるのはたつた一人の娘さうだがね。」

斯う云つて彼女は自分が娘と暮してゐる様や、孫が幾人あるなんてことを喋り出した。

「私も最早大分弱つたが、それでも未だ働いてゐるんです。私は子供が大好きで、子供達も皆ないゝ子供達です。あれ等のやうには誰も私を可愛がつて呉れません。アンニイは私が家にゐると傍を離れつこなしなんですよ。何時もお祖母さん、お祖母さん、おばあちゃん、なんですよ。」

お婆さんは斯う云つてすつかり心を軟げられて了つた。子供の方へ眼をやつて云つた、

「彼はほんの子供さ、神様のお恵みあれ。」



彼女は袋を肩げやうとしたが、つと子供が馳け寄つて云つた、

「あたにかつがしてお呉んな、小母さん。あたの小母さんの行く方へ行くんだよ。」

お婆さんは叩頭ツケいた。そして彼にその袋を任せた。

彼等は一所に街をやつて行つた。そしてお婆さんはマルチンから林檎のお錢を貰ふのも忘れて了つた。マルチンは彼等の姿を何時までも見送つて、彼等が歩きながら互ひに話し合つて行くのに耳を澄しながら立つてゐた。

彼等の姿がすつかり見えなくなつて了ふと、彼は戸の内へ入つて行つて、石段の上に壊れて落ちてゐる眼鏡を見つけた。そして大針を取つて、再び仕事を始めた。然し間もなく日が暮れかゝつて来て、最早穴に糸を通すことが能きなかつた。聽てのこと點燈夫が街燈をつけに通つて行つた。

『これはもう燈をつける時刻だな。』と彼は想つた。

そこで彼はランプの仕度をして、それを上からつるして仕事をつゞけた。間もなく彼が縫つてゐた長靴が出来あがつた。それを彼は四方から眺めて、好く出来てゐることを確めた。で彼は道具をかたづけ、切屑を掃き寄せ、糸や針やまたは柔皮を一所に纏めて、さて洋燈を外して卓子の上に置いた。それから彼は聖書を棚から取り出して昨夜柔皮の片を架に挿んで置いた所を開かうとしたけれども、まるで別な所が開かれた。するとマルチンは不意に昨夜の夢を思ひ出した。そしてそれを思ひ出すや否や、何だかある音が聞えるやうに思はれた——室の中に足音が。彼は振返つて、見廻した。暗い所に人が立つてゐるやうに思はれた——何だかよく識別けられない臃げな姿が、

ある聲が彼の耳に呟いた、

「マルチン、マルチン！ お前さん私を知らないのかい？」

「誰だい？」とマルチンは云つた。

「私だよ」とその聲は云つた。

するとステフェンの姿が暗がりから出て来て、頬笑んで、雲のやうにかき消えて了つた。そしてそこには誰もゐなかつた。

『それから私もゐますよ、』とその聲が云つた。

子持の女が暗闇から出て来た、そして女は頬笑み、子供は聲を出して笑つた。彼等も矢張り消えて了つた。

マルチンの靈魂は喜びに満たされた。彼は十字を切つた。そして眼鏡をかけて本のいま開けた所を読み始めた。その頁の初めに斯う書いてあつた――

『そはなんぢら我が飢えし時われに食ませ、渴きし時我に飲ませ、旅せし時わ

れを宿らせければなり。』

そしてその頁の終ひには斯う書いてあつた――

『爾曹わがこの兄弟のいとちひさきもの、一人に行へるは、即ち我に行ひしなり。』

そしてマルチンは彼の夢が彼を欺かなかつたことを、基督がその日彼をお訪ね下さつたことを、そして彼が基督を本當に歓迎したことをわかつた。

## 三つの死

それは秋であつた。一つの馬車と一つのキャレッシュユウとが大通に沿うて足ばやに駆けつて居た。馬車の中には二人の女が座つて居た。一人は主婦で瘦せて蒼白かつた。今一人はその召使で、小綺麗で華かで快活であつた、彼女の短い

バサ／＼した髪の毛は色ざめたボンネットの中からはみ出して居た。やぶけた手袋をはめたその美しい手は時々それをなほした。檻樓で覆はれたふくれた胸は健康な息づきをして居た。そのすばやい眼は、窓から急ぎ過ぎゆく野をちらと見たり、主婦の面を無遠慮に覗めたり、馬車の隅のこのところを落着きがなく眺めたりした。召使の直ぐ鼻ツ先きで、主婦のボンネットは馬車の網にくつついてブラ／＼と揺れた。彼女の膝の上には小さな膝狗が寝て居た。彼女の脚は車臺の上に置かれて居る小箱の上に載せられて居るので高まつて居た。そしてその上をコト／＼と打つ足の音は、車の旋條の轆りや窓硝子のガタ／＼云ふ音の間にも聞かれた。

両手を膝に、眼を閉ぢて、主婦は、後ろに積み重ねられて居る枕の上で静かに揺れて居た。そして始終咽喉の中で咳をしつゞけながら微かに眉毛に皺をよ

せた。頭には白い寝帽を冠り、生地の頸には青いハンカチーフが捲きつけられて居た。真直なわけ筋が、寝帽の下にもつゞいて、赫い非常にうまく梳きつけられた、そして手入のとゞいた髪の毛に通つて居た。その太いわけ目のところの皮の白さには、何かからバサ／＼した死の様なものがあった。しなびた、いくらか黄色な皮膚は、繊細な美しい顔に、いくらかたるむで懸つて居た。頬や顎は桃色をして居た。彼女の唇は乾いて落着きがなかつた。彼女の旅行服は彼女の萎縮した胸の上に折目正しくして蔽はれて居た。その眼が閉ぢられて居たにも拘らず、主婦の顔には、疲れと、苛々しさと、惱みとが見えて居た。

馭者臺に座つて居た従僕は座睡をして居た。馭者は烈しく叫びながら、その丈夫な、汗をかいて居る四頭の馬を鞭つた。そして時々同じ様に烈しく咆えて居る彼の後のキャレツシユの馭者を振りかへつて見た。

迅速に回轉して居る護謨輪の、廣い二條の轍くるまあとは白堊質の泥濘ぬかるみの途に沿うて滑らかに展ひろがつて行つた。空はどんよりとして冷たかつた——冷たい霧が野原や道を包んだ。馬車の中はeau de Cologneや塵埃の匂ひでもつて息づまる様であつた。病める女は頭を後ろに垂らして漸々に眼をあけた。彼女の大きな眼はきら／＼と光つて居た。そして非常に美しい黒い色をして居た。

『またこれだ』と、その美しい瘦せ衰へた手で、彼女の脚にちよつと觸れて居た召使の下袴の隅を腹立たしげに押しやりながら曰つた。そして痼性に口を尖らせた。召使は自分の下袴をその両手で握んで、しばらくは頑丈な脚で立つて居たが、少し離れて座つた、彼女の生々した顔はそれで赫くなつた。従僕の美しい黒い眼は召使の凡ゆる動作をしつこく追うた。やがて主婦は馬車の座褥ざまくに兩脇をたて、少し高いところに座らうとして自分の身を持ちあげやうとした。

しかし彼女の方ではそれは駄目であつた。彼女の口は尖つた。そしてその顔全體は力のない腹立たしい嘲笑の表情をおびた。

『すけてお呉れよ、お前——いや、可い／＼、そんな用はない。私は自分で出来る。たゞ後生だからお前の——さうだな、何と云つたらいいか——お前の包みを私にのつけずにお呉れ。と云ふよりは、私に少しも觸らないで居て呉れりや尙い。』

主婦は眼をとぢた——かと思ふとまた直きにその睫をあけて召使を見た。召使はそれを見かへして美しい下唇を噛んだ。深い溜息が病人の胸から出た。しかしその溜息は咳の中に消えた。彼女は側を向いて眉をひそめた。そして両手で胸を掴む。咳が止むと、彼女はまた眼を閉つて、ちつと座りつゞけた。馬車とキャレッシュとは村に入つた。召使はその短衣デヤケットの下から太つた手を出して

十字をきつた。

「何うしたの」と主婦はさいた。

「停留場でムいます、奥様。」

「なぜお前は十字をきつたのだ、と私は訊いたのだよ」

「教會の前を通つたのです、奥様。」

病人は窓の方に向いて、病人の馬車が丁度今その周圍を通つて居る大きな村の教會を大きな眼で眺めながら、ゆるやかに十字をきつた。

馬車もキャレツシユも二つながら停留場に止つた。キャレツシユからは病める女の夫と醫者とが出て來た。そして馬車の方へやつて來た。

「如何です、只いまは」醫者は彼女の手をとり、脈を診ながら訊ねた。

「少し疲れやしないかいねお前、」彼女の夫は佛蘭西語で訊いた。「出たくないか

ね。」

召使は膝掛に注意しながら出来る丈け會話の邪魔をしない様に隅の方にくつろつた。

「どうでもありません。大したことはありません」病人は答へた。「出たくもありません」

夫はちよつとの間立ち停つて居た後、停留場の中へ入つた。召使は馬車から飛び降り、爪先き立ちで軽やかに歩いて泥濘を越えて戸外に行つた。

「私の氣分が優れないと云つて、あなたが朝飯を御あがりにならない理由にはなりませんまい」と病人は、馬車の窓のところに立つて居る醫者に向つて、微笑かに笑ひながら曰つた。「誰も私には關つて呉れはしないのだ」醫者が音もたてずに彼女を離れ去り、そして山猫の様に停留場の階段をかけ上るや否や、病人は

附添へて曰つた。「あの人は達者だ——だからみんな同じなのだ。あゝ、あゝ」

「ねえ、エドワード・イワノウヰッチ」夫は醫者に會つた時、愉快氣な微笑をもつて腕を抱きながら曰つた。「私は一杯注文したんです。何うですね、あなたは」

「あゝ、それは結構です」醫者は答へた。

「彼女は何うでせうね」夫は溜息をつき、聲をひそめ眉をあげながら訊ねた。

「とても伊太利までは行かれずまい——モスクワまで行ければいゝが——特に此の天氣では」

「あや。あや。ぢや、何うしたらいいんでせう——そして夫は手をもつて彼の眼を掩うた。「此處だ」と彼は飲物を持つて來た男に曰つた、

「そのお考へは斷念しなければなりませんまい」醫者は答へた。肩を聳かしなが

ら

「しかし、ぢや私が何うしなけりやならないのか曰つて下さい」夫は言ひ張つた。

「私は彼女を止めさせやうと思つてあらゆる手段を講じたんですよ。私は私の財産のことから、私達が後に残して來なけりやならぬ子供達のことから、そして私の仕事のことなどを話してきかせたのです——そして彼女は何もきゝ容れないんです。彼女は宛然まつたく健康者でもあるらしく外國で住まうと云ふ計畫をたてるのです。で、彼女の女の本當の状態を話さうものなら——左様、彼女を即刻殺してしまふ様なものでせう」

47

「奥様はもう死んで居るのも同然だと云ふことをあなたは知らなけりやなりませんよ。ワシリイ・ドミトリイエウヰチ。肺がなくなつては誰も生なすかりッこはありませんよ、また、肺が二度と出來はしないし。傷ましい悲惨事です。しかし何

とも仕様がありません。今のところ、貴方及び私のなし得るところはたゞ、此の先の途を出來るだけ樂にしてあげる様に氣をつけることより外はないんです。今はもう坊さんの役目なんですから』

『あゝッ、貴方には私の立場がわかるでせう。何うして私は、彼女に最後の願ひを思ひ起させることが出來ませう。や、什麼ことがあつても私はそれを彼女の女に告げることは出來ない。彼女の女はあんなに美しい女だのに……』

『でも、あなたは冬まで止まる様に説きふせて見なけりやまりませんよ、』醫者は頭を意味あり氣にふりながら云つた。——『それから道がわるいだらうと云ふことを。』

『アクスーシヤ、アクスーシヤ、』驛長の娘が叫んだ。頭にシヨールをかけながら、そして泥まぶれの裏梯子を駆け降りながら。『來て、シヤキンシヤヤの

奥さんを御覽。何でも胸の病氣のために外國へ行らつしやるんださうだよ。わしはまだ肺病やみを見たことがない』

アクシユウシヤは鬨を跳び超えた。そして二人は互に手に手をとつて門の方へかけ出した、二人は歩調をゆるめて、馬車の側を通り、そして開き窓の中を覗き込んだ。病人は顔を二人に向けた。しかし彼等が物好きにキョロ／＼して居るのを見て顔をしかめて横を向いてしまつた。

『まあ！』と驛長の娘はすばやく頭を向けかへながら叫んだ。『どんなに綺麗であつたか知れないのに、今ではまあ、恐ろしい位ね。見えて？ 見えて？ アクシユウシヤ』

『そして何てやせてるんでせう』アクシユウシヤは調子を合せた。『いらつしやいよ。そして馬車の底に何があるか見ませうよ。あれ、あの人はあちらを向いて



しまつたわ。私半分しか見ないわ、可哀想ね、マーシヤ」

「さうね。まあ泥だらけだわ」——かくて彼等は二人とも門を通つて走り歸つた。

『屹度私はこわく見えるのだよ』と病人は考へた。

『おい、何うしても急がなければ。急いで外國へ行くんだ。さうしたらそこで私はまたよくなる』

『何うだね今は』馬車の側へ來ながら、そして何か少し噛みながら、夫は訊ねた。

『何時もあきまりだ』病人は考へた。『何れにしても、あの人の食慾にはかわりがないと見える』

『何うもありません』彼女は齒の間で咬いた。

『ね、私はお前が旅行のためにすつかり悪くなりやしないかと心配して居るんだがね。ことに此の天氣では。それにエドワード・イワノウツ<sup>チ</sup>も同じ様なことを云ふんだ。何うだね家へ戻つては。』

彼女は餘りに腹をたて、物も云へなかつた。

『天氣は間もなくよくなるだらう。旅行はのばすことも出来るんだ。そしてお前はその時もつとよくなるだらう。——吾々はみんな一緒に行いてい』

『御免なさいな。もし私が今あなたの被仰<sup>かつしや</sup>ることを少しもさいて居ませんでしたら。私は今直ちに伯林に行つて居たいのです、そしてまた非常によくなるでせう』

『何うしたらよかつたんだ。私の天使さん。そんなことが全く出来ないのはわかりまつてるぢやないか。だがお前が、さうだ、ほんの一月、うちに止まつて

居たら、お前はずつと快くなる、私は私の仕事を仕上げる、そして吾々は子供を連れて行くんだ』

『子供たちは達者ですが私はさうぢやありません』

『だつて、お前、まあ考へて見るがいい。この天気では、まあ、お前が途中でわるくなつたと想像する……。だがうちに居ると、兎も角も……』

『うちで、え。私はたゞうちで死ぬんです』病める女は感情的に答へた。

しかし死ぬと云ふ言葉は明白に彼女を驚かした。——彼女は黙り込んだ、そして疑はし氣にその夫を視た。彼は眼を落して黙り込む。病人の眼は急に子供らしく光つた。涙が彼女の眼から流れた。夫はポケットハンカチーフ手帛で顔を掩うた。そして馬車を出た。

『いや、私は行く』病人は眼を天に向けながら曰つた。そして腕を組み、とり

とめもなく眩き初めた。

『何うしてかうなんだらう。何うしてかうなんだらう。』彼女は曰つた。そして涙が益々烈しく流れた。

彼女は長い間そして熱心に祈つた。しかし彼女の胸は依然として傷むで苦しかつた。空も、野も、道路も、何もかも依然として灰色で陰氣であつた。そして秋霧が深くもならねば浅くもならず、以前まへと少しも變りなく、道路の泥濘の上にかゝつて居た。また小屋の屋根の上にも、また、馬車や、強い愉快な聲で話し合ひながら車の輪に油を注いだり、新しい馬をつけ代へたりなんかして居る馭者の、羊の毛皮の着物の上にも。

馬車の用意は出来た。しかし馭者はまだぐづついた。——彼は停留場の待合室に入つて居たのだ。人間や焼きパンやキャベツや羊皮の匂で充ちて居る驛室は熱くて息苦しくて暗くてそして重苦しかった。かなり澤山の馭者がその居間に居た。料理人は暖爐のあたりで忙しかった。そして暖爐の上には羊皮を被た病人が臥て居た。

「クエーデル小父、クエーデル小父てばさ」羊皮の上着を着、帯に鞭を挟むで居る若い男が室の中に入つて来て、病人の方に向ひながら叫びだ。

「何で手前はかくれまわつて居るのだ、フェードカ、やい」他の一人の馭者が訊いた。「馬車が手前を待つてるのを知らねえのか」

「俺の靴がやぶけたから、借りてかうと思つてんだ」髪の毛を後ろに撫でやり長手袋を帯の間にねぢ込みながらその男は答へた。「おい、クエーデル小父、睡てんのかね」ストープの方に進んで行きながら彼は繰返した。

「何だね」と力のない聲が響いた。そして、瘦せた赤鬚の顔がストープ越しに眺めた。広い、血の氣のない、毛が一杯に生えて居る瘦へた手が、垢だらけのシャツでやつと掩はれて居る骨と皮ばかりの肩の上に、餘程の骨折りでもつてアーミヤークを引きよせた。「水を一杯おくれよ。お前、何用だね」

若い男は水差しに水を一杯入れてもつて行つてやつた。「ねえ、テッディ」ちよつと立つて居てから彼は云つた。「お前さんはもう新しい長靴用んねえだらう。俺らに呉んねえか。もう今ぢやお前さんは歩るかねえだらう、ねえ、テッディ」

病人はやつれた頭をチャンのかけた水差の上に曲げて、濁つた水でバラ／＼に生えたるすい鬚を濡らしながら、力よわくそしてガブガブと飲む。彼のグチャ／＼した鬚は清潔ではなかつた。彼の落ち窪んだ濁つた眼は非常な骨折りでもつて若い男の顔を見上げることが出来た。

水から口をひきとつたところで、彼は彼の濡れた唇を拭はんがために彼の腕を上げたかつた、しかしそれが出来なかつたので、その代りにアミヤークの袖口で拭いた。黙つて、そして鼻で重い息をしながら、彼は彼の全ての力を集めて若い男の顔を真直に見た。

「誰にもやるつて約束してないんだんべ、あるのけ？」青年は曰つた。そいつは大したことあねえが、實あ戶外は泥だらけなんだ、ところが俺らは、そこで働かなきゃならねえのだ。で俺等は自分で云つたのさ。——テディに云つてあ

の靴もらはふ、テディは兎も角もう用んねえだらう、——つてさ。なあ、テディ何うだね。あんなものもうお前はいらねえだらう？」

病人の胸には何かこみ上げて来てゴロ／＼云つた。彼は身體を曲げてひどい咳をし初めた。そして容易にそれを止めることが出来なかつた。

「ほんとにさ、あんなものお前さんに何の用があるもんかね。」腹立たしくそして不意に料理人が嗚がれ聲をたて、叫む。彼女の聲は部屋中ひびいた。「お前さんはもう一月以上も此の暖爐にこびり着いて居るんだよ。ね、すつかりカタナシぢやないか。何故つて體の中はすつかりいけないんだもの。丁度いまそれをきいたろ。何んで彼が新しい靴なんかいるものかね、まさか墓の中まで埋めてもらはうて云やしまいしさ。それに今は、もうお前さんがお前さんの罪の赦しを神さまに願ひすべき時だとわたしは思ふよ。お前さんはもう全くだめに

なつて居るんだよ、ほんとに、お前さんは彼の爺を此の部屋から彼の部屋にも  
何處どこにもつれてくことは出来ねえだらうな。町には病院があるてえことだが、  
だつてそれが何になるむだね。どの隅々までも満員さ。彼の人も運動はしてみ  
たんだよ。兎に角お前を入れて呉れる室はないんだよ。それにお前さんの様な  
きたないものは御免だよ。』

『あゝい、セレエガー、早く行かないか。旦那様方はお前を待つてるんだよ。』  
驛長の聲が戸のところまで叫んだ。

58

セレエガは答をきかないで行きたかつた。しかし彼は、たえず咳をして居る  
病人が何か云ひたさうにして居るのを見ないわけには行かなかつた。

『長靴をもつて行つてもいゝよ、セレエガ！』咳をおさへ、少し樂に息をしな  
がら彼は曰つた。だがね。俺らが死んだ時にや石塔を買つて呉れるんだぞ』彼

は嗔がれ聲でつけ加へた。

『有りがたう、おやぢ！ ぢや俺らはあれをもらつてくよ、ア、。そして石塔  
をな、ア、。いゝともく、買つてあげるよ。』

『これ、お前たちはあの男の云ふことをきいたか、子供たち。』病人は出て来る  
ことが出来た。しかし直さにまた俯伏してしまつた。むしかへして来た咳で息  
づまりながら。

59

『さうだ、約束だ。俺等がきいて居る』馭者たちのうちの一人が曰つた。

『あゝい、セレエガ、早く来ないか』驛長はまた中を覗きながら曰つた。『シヤキ  
ニスカヤ夫人は病人でいらつしやるぢやねえか』

セレエガは彼の大きな破れてふくれた長靴を脱いで腰掛の下に投げ込んだ。  
クエーデル小父の靴はわけもなく彼の脚に合つた。そしてセレエガはそれを眺

めながらそこを出て、馬車の方へ行つた。

「こいつあいくらか長靴らしいや。一つ磨いて見やうぢやないか」セレエガが馬車臺に乗つて手綱をとつた時に、手に靴バケを持ちながら馭者が云つた。「手前それをたゞせしめて來たのか」

「見えるだらう？、どうだね」セレエガが曰つた。立ち上つて脚の周囲のヤアマークの折目をなほしながら。「さあ、それぢや出かけるんだ、別嬪さんたち」と彼は馬に叫んで鞭をあてた。そして馬車とキャレンツシユとは旅人とトランクと包みとをのせて、濡れた道に沿うて、灰色の秋霧のうちに消え去つた。

病氣の馭者は息づまつた室の暖爐の上にとゞまつた。そしてもう咳もしないでドッコイショと向きかへつて、静かにして居た。

夕方になるまでも人々はその中に入つて來ては出て行つた。そして何か食べ

た。その間ぢゆう病人は一ことも語らなかつた。日暮になつてからコックが暖爐のところによつて來た。そして彼の脚からタリツプ(羊毛の上衣)をとつた。

「怒らないであくれ、ナスターシア」病人は呟いた。「どうかお前さんの家の片隅へでも置いといてお呉れ」

「うゝともぢ、うゝともぢ。勿論！ ちよつともかまやしなよ」ナスターシヤは唸つた。「だが、小父さん、何處がわるいんだね、お云ひよ」

「何うか知んねえが、體のうちが一體に妙なんだ」

「心配することはねえよ。咳をするとき咽がいたいのか？」

「いつも痛みどほしだ。俺らはもう死にかけてるんだ。たゞそれだけのことつた。あゝ、あゝ」病人は呻つた。

「脚をお包みよ、さうしなけりやいけないうよ」ナスターシヤは暖爐から降りて

ヤルマークを彼にかけてやりながら云つた。

夜ぢゆうランプがボンヤリと部屋を照らした。ナスターシヤと十人の馭者は床の上や腰掛の上に、大きな駢をかきながら寝た。たゞ病人だけは暖爐の上で力よわく呻つたり咳をしたりして轉輾反側した。朝になつて彼は非常に静かであつた。

「わたしはゆうべ奇妙な夢を見たよ」とコックは翌朝、曉の薄ボンヤリした光のうちに脊のびしながら曰つた。何でもクエーデル小父さんが暖爐から降りて来て樹をさりに行つた様だつたよ。「何かお手傳しやうかな、ナーシイ」と云ふのだ、そこでわたしは云つたのだ、「ぢや、外へ出て樹を截つてくれたらいいぢやないか」ツて。するとね、あの人は斧を取つて樹をちよぎり初めたんだよ。その早いことツたら木片が四方八方に飛び散る位だつたのだよ。「一體これは何

ふわけなんだね」と私は云つたんだ。「お前さんはあんなにひどくわるかつたのに」「いや」とあの人は云ふんだ「俺等は達者なんだ」ツて。そしてその手を動かしてけるんだ。その時の恐ろしかつたことツたら。わたしはおめいてそして眼がさめたのさ。まさか死んでやしまいな。クエーデル小父、クエーデル小父、クエーデル小父ツてば」

しかしテオドルからは何一つ音も來なかつた。

「まさか死んでやしめえなあ。見て來やうぢやねえか」半睡半醒の眠さうな馭者の一人が云つた。

暖爐からぶら下つて居る、そして赤い、毛だらけの瘦せた手は冷たくそして白かつた。

「檢察官にとゞけて來るがい。死んでる様だ」と馭者は云つた。

テオドールは親戚をもたなかつた——みんな死んでしまつて居たのだ。次の日彼等は森の後ろの新しい教會の墓地に彼を葬つた。その四五日の間はナスターシャは自分の見た不思議な幻について、また、テオドール小父と別れた最初の人々が彼女であつたことについて、誰彼れの區別なしに話して居た。

三

春が來た、町の濕めツぽい街道の氷つた堆肥の間には 小さな急流が音をたてゝ流れた。町の中を動きまわつて居る人々の着物の色あひや、人々の會話も快活で嬉々として居た。垣根の後ろの小さな花園には、木々の蕾がほころび出し、その枝は新鮮なそよ風にふかれて殆んどきょとれる位に搖れた。どこもか

しこも一帯に雪どけがした。透きとほつた露の玉はお止みもなく滴つた。雀は喧びすしく囀りながら、小さな翼でとびまわつた。路の日あたりの好いところでは、町の家でも村の家でも、垣根のうしろにあらゆるものが輝やいて生々して居た。天にも地にもそして人の心の裡にも若さと幸福とが甦へつた。大通りの一つの家である、ある紳士の邸宅の前には、刈りたての麥藁が並べられてあつた。家の中には、そんなに熱心に外國に行きたがつて居た例の死にかゝつた病人が居た。病室の閉ざられた戸のそばには病人の良人と肥つた女が立つて居た。長椅子の上には、元氣の無い眼をした僧侶がエビトラチリオンの中に包まれた何かを持ち乍ら坐つて居た。隅の方の大きな安樂椅子には一人の年とつた婦人、母が引きつる様に泣いて居た。彼女の傍には一人の下女が、清潔な半巾きれいなを手にして立つて居た。そして此の老婦人の云ひつけを待つて居た。他の下婢そんご



は此の老婦人のこめかみを揉み乍ら彼女の帽子の下の灰色の毛の間を吹いて居た。

「さあ、何卒」と良人は戸の傍で彼のわきに立つて居る頑丈な女(妻の妹)に云つた。『彼女は其處に貴女を信用して居るのです、貴女は彼女に什麼に話すべきかを知つて居なさる、ね、はいつてうまく説きすゝめて下さい』かうして彼は今少しで戸を開くところであつた。然し妹はそれを遮ぎつた、それと同時に手で眼を拭き乍ら頭を振つた。

「いゝわ、もう泣いてた様には見えませんわね」と彼女は云つた。そして自分で戸を開けて中には入つた。

良人は非常に昂奮して居た。そして全く氣を取り亂して居る様に見えた。彼は老婦人の方に歩みを寄せた、併し五六歩とあるかぬうちに向き返つて室を横

ぎり、祭司の方に近づいた。祭司は彼を眺めた、そして眼を天に向けて溜息をついた、彼の濃い灰色の口鬚は、上にあがり直ぐにまた下つた。

「我が神！我が神！」と良人は云つた。

「どうにもし様がありません」祭司は嘆息し乍ら云つた、そして再び彼の眉と鬚は上つて下つた。

「そして彼女の母が其處に！」と良人は絶望的に云つた。

「母には耐へ切れないでせう、どんなにか愛してるんですから、あゝどうしたらいいのか。どうか貴僧母をなだめて此の室を出させて下さい」

祭司は立ち上つて老婦人のところへ行つた。

「母の情！——あー！誰が其愛をはかり得ませう。併し！神は恵み深い」と彼は云つた。

老婦人の顔は急に曇つた。そしてすゝり泣きし始めた。「神は恵み深い」彼女が少し静まつた時祭司は繰り返した。「私はそれにまた、私の教区内にマリア・ドミトリエウナよりもずつと重い女の病人があつたのを知つて居ますがね、貴女はどう思ひますね——たゞの店商人が薬草でもつて一寸の間に其女を癒しましたよ、そして其商人がモスクワに居るんで私は今一つ其男に頼んで見たらどうかと、ワシリイ・ドミトリイキチに話して居た處です。兎に角、病人を癒すかも知れませんが、神にはどんな事でも出来ない事はありませんから」

68

「いえ、彼女はもう助かりますまい」老婦人は遮ぎつた。

「神様が彼女をお取りになつたなら、私はどうなるでせう」そして彼女は殆んど意識を失つてしまふ程に激しい感情に擱はれてしまつた。病人の良人は手で顔を掩うて室をかけ出した。外の廊下で遇つた始めての人物は六歳になる彼の

子供であつた。子供は其小さな妹を追ひかけ乍ら、上機嫌で居た。

「どうした！子供達をおつかさんの處につれて来いと云はなかつたかね」と彼は乳母に尋ねた。

「いゝえ奥様は皆様にお會ひになり度いとは仰しやいませんでした」

子供たちはちよつと止まつて、父の顔を一心に眺めた。が、不意に父の脚を蹴とばして歩いて、愉快さうに叫びながら遠くの方へ走つて行つた。

「此の兒は私の小さな黒馬の眞似をしてるんだよ」と小さな妹を指さしながら子供は叫んだ。

69

一方ではまた、病人の妹が病人の側に座つて、人爲的に用意して居た會話でもつて、病人に死の事を考へる時の用意をささうと努めて居た。醫者は他の窓際で藥を調合して居た。

病人は白い闇衣カミカミを着、四方八方から枕でもつてつゝ、かいぼうかいぼうをされて、寢床の上に座つて居た、そして黙つて妹を眺めて居た。

「あゝ、お前」と彼女は急に妹の言葉を遮つて叫んだ『そんな準備をささないでおくれ、私を子供にしてお呉れでない。私は基督信者です。私はそんなことはみんな知り抜いてます。私はもう長く生きて居ないことを知つて居ます。私はまた、うちがもつと早く私の云ふことをきいて下さつたなら、今頃は伊太利に行つて居て、そして多分——いや慥かに——全くよくなつて居たらうと思ふんです。衆人みんながうちにさう云つて居るんです。だが神様の御旨なら何うにも仕様がな。私達はみんな償はなけりやならぬ澤山の罪をもつて居るんです。私はそれを知つて居ます。だが私は、私達凡ての罪を赦して頂くために神様の御慈悲によりすがります。——屹度神様は私達凡ての罪を赦して下さるに相違

ない。私は自分をしらべて見ました、そして償はねばならぬ澤山の罪をもつて居るのを知りました。そして私はその時どんなに苦みましたか。私は私の悩みを忍耐ひたすらかかたへ忍ばうと思つて居るんです』

「ぢやあの小神父さまをおよびませう、ね、姉さん。さうするともつと樂々と神様にお告げが出来るでせうから」と妹は答へた。

病人は同意のしるしに頭を傾けた。

「神さまお赦し下さい。私を——罪人を」彼女は呟いた。

妹は外に出て小神父を手招いた。

「もうあの世の人です」と彼女は眼に涙をためて夫に云つた。

良人は泣き初めた。祭司は戸を通つて過ぎて行つた。老婦人は尙も何も知らずに居た。前座敷では何事も凡て全く穩かであつた。約五分間もして、祭司は

また戸の外に出て来た。そしてエビトラチリオンをはづして髪の毛を撫でた。  
『有りがたい事には、段々静平おたやかになつて来ましたよ』と彼は云つた『いま衆人みんさんに會ひ度がつて居ます』

妹と良人が入つて行つた。病人は静かに泣いて居た、そして聖像を眺めて居た。

『御目出度う、私のお友達』と良人は曰つた。

『有りがたう。今はどんなに私はせい／＼して居ますか。何とも言ひ様のない喜びを感じて居ます。』と病人は曰つた。そして軽い微笑が彼女のやせた唇に浮んだ。『什麼に神さまは恵み深いのでせう。——さうぢやなくて？神は恵み深くて全能であらうしやる』そして唇に熱心な祈禱を唱へ、眼を細くして聖像を瞻めた。

遽に何かと彼女に起つたかのように見えた。彼女は彼女の良人を招いて自分の側にひきよせた。

『あなたは私の御願ひすることを少しもしては下さらない』と彼女は纖弱かよかいぶつ／＼聲で曰つた。

夫は首をのばしておとなしく聽いてやつた。

『何だね、お前』

『幾度私は、こんなお医者さんたちは何も知らないつて言つたか知れませんが。ほんとに醫いすのは何でもない薬なんです……小神父おとこさんは丁度いまさう被仰つていらした……店商人があるつて……それをよこして』

『誰をだつて、お前』

『あゝ、あなたは何も御存じでない。』病人は顔をしかめた、そして眼を閉ぢ

た」

醫者がやつて来て彼女の手をとつた。眼は明かに次第／＼に弱くなつて居た。彼は夫を手招いた。病人はその手ぶりを見た、そしておづ／＼とあたりを見まわした。妹は背をそむけて泣いた。

「泣かないでお呉れ、お前さんをも私をも苦しませないでお呉れ」と病人は曰つた。「私の感じて居た小さな平和が奪はれてしまひます」

「あなたは天使です」と妹は彼女の手に接吻をしながら曰つた。

「いや、／＼、こゝを接吻してお呉れ！……私達の接吻をして居る手は、ほんに屍の手です！　お、神よ、神よ！」

その同じ夜、病人は既に死骸であつた。そしてその死骸は大きな家の客間の中に、一つの棺臺の上に置かれてあつた。戸を締めた、大きな室には寂しい教

會歌唱者が鼻聲でダビデの詩篇を節をつけて歌ひながら立つて居た。大きな銀の燭臺の蠟燭からの煌々たる光りが死人の白い額に、厚ぼつたい蠟の様な手に、棺衣の石の様に硬い壁に、恐ろしい程につき出た膝や踵の上に、射し輝いて居た、唱歌者は何を自分で曰つて居るかを知らないで、よくはかられた調子で誦へつゝけて居た。そしてその静かな室では、言葉は異様に響いて消え去つた。時々、遠い室からは、子供たちの聲や喧騒の響が飛んでやつて來た。

「爾そのみ顔をかくし給ふ時、彼等は惱む」歌唱者は曰つた。彼等の息をとり去り給ふ時、彼等は死す、而して再びまた塵に還る。爾その靈をふくり給ふ時、彼等は甦り、而して地の面を新にす。かくて主の榮光、かぎりなく保たん」死人の顔は嚴肅で莊嚴であつた。淨い冷たい前額と、固くしまつた唇は、靜乎として動かなかつた。彼女は非常に注意深かつた。しかし彼女はその時でも

なほ、此れらの悲愴な言葉をきゝわけることが出来たであらうか。

#### 四

一月程して大理石の石碑が死人の墓場の上に建てられた。馭者の墓はなほもその首石かみいしがなかつた。そしてたゞ活々とした新鮮な草がその小さな塚の上に生へて居た。此の世を去つたある人がかつて存在して居たと云ふ唯一のしるしとして。

「お前、罪だよ、セレエが、クエーデルに石塔をたてゝやらにや」とコックは一二度となく曰つてきかせた。「冬はまだ長い、冬はまだ長い、ツて、ばつかり云つて居たぢやないか、それにお前は、今にまだ約束を果さないんだよ。みんな

私の前で云ひ、またしたんだよ、覚えておいで」

「いゝよ、俺らがしらねえツて云つたかね」とセレエは答へた。「俺らの言つ通り石を買ふよ。石を買ふよ、そしてその時にやそれに一留半出すよ。それを建てねえぢやなんねえ事を忘れやしねえよ。町に行きささえすりや買つて来べえ」  
「何は兎もあれ十字をたてろよ」年寄りの馭者が口を挿んだ。「そりや何と云つてもさつぱり手前がわるいよ。——手前、まだあの靴を穿いて居るだらうがな」

77

「何處から十字を買つて来るだね——材がないのに伐らりやしないよ」  
「材がなさや伐られねえ、あゝ。いゝ口實だ。斧をもつて朝もはやく森の中へ行くがえゝ。樂にいくらでも伐られらあねえ。若え白楊を伐るんだ。お前が×リュベツトを拵らえるのにやそいつで十分だ。」

×十字架の墓、その上に覆ひがある。

朝はやく、日がまだ殆んど明けやらぬ間に、セレエガは斧をもつて森の中に入つて行つた。

凡ゆる者の上に、日光に輝らされない、静かに落ちて居る露の冷たい白玉が置いて居た。東の方は見られない程かゞやいて居た。そしてその繊弱い光は天蓋に垂れかゝつて居た美しい通り雲に反射して居た。脚もとの草の葉の一つも高い樹の枝の一枚の葉も動いては居なかつた。たゞ森の一ばん繁り合つた部分で稀れにさこえる小さな翼のはたきや、地の上のバサ／＼と云ふ音のみが森の沈黙を破つた。俄然、自然には不思議な音が起つて、やがてまた森の彼方へと消え去つてしまつた。しかし再びまた此の音が起つた、そして不動に立つて居る一つ樹の幹をめぐつて下の地面を規則だつた間を歩いてその音が繰返され初めた。すると、一つの樹の頂<sup>み</sup>さが常ならぬ震動をはじめた。濕り氣の多い葉

は何かを呷き初めた。その枝の一つにとまつて居た一疋の鶉は一とび二とびとした後に、その尾を動かしながら、小さな音でビイと鳴いて次の樹にとび移つた。

下では斧は益々深く入つた音をたてた。汁多い白い木片が露にしめつた草の上に飛び散り初めた。微かなバチ／＼と云ふ音が打ちおろす斧のあとに、やつとつゞいた。樹の幹の全體が震えて前の方に曲つてはまた、直ぐさま元の様に真直になつた。その根もとまでも動揺<sup>ぶく</sup>つきながら。しばらくは全く静かであつた。しかし直ぐにまた樹はやゝ前方に首だれた。樹の裂ける音がまたきかれた。そしてその枝をぶちこはし、小枝を散らして、それは前方に、濕つた土の方にドツと倒れた。斧の音も、足音も止むだ。鶉はまた囀つた。そして少し高くとんだ。樹にくつついて居た枝はしばらくの間あちこちとゆれて居た。しかし

それも他のものと一緒に葉をつけたまゝ静まつてしまつた。他の樹は今までよりはもつと美はし氣にそして喜ばしげにつツ立つた。此の自由な空間に動かぬ枝をのばしながら。

太陽の最初の光線は透明な雲をとほして空に輝いた。そして迅速に地と天とを通りすぎた。霧の浪は谷間を溢流し初めた。輝く露は緑の葉や牧草の上におどつた。透明な白い雲は青い蒼穹を横きつて馳せた。島は森の深みを小やみもなくとびまわつた。そして恰も有頂天になつて居るかの如くたのし氣に囀つた。濕ひのある葉は木の上で喜ばし氣にそして靜かに叫いた。そして生きて居る樹の枝は、倒れた樹の死んだ幹の前に嚴肅に、そして悲愴にすれ合つた。

## 悔悟せる罪人

かつて此の世に七十年の間住んだある人があつた。そしてその間始終彼は罪の生活を送つて居た。ところが此の人は病氣になつた、けれども彼は悔改めなかつた。そして愈々死がやつて來た時に、その最後の斷末魔と云つた場合に、彼は涙にむせむでそして曰つた。「主よ、あなたが十字架の上の盜人を赦し給うた如く私をも赦し給へ」と。彼の靈魂が離れ去つて居た時分には、彼は殆んど



これと言ふことが出来なかつた。しかし今や罪人の靈魂は神を愛した、そして彼の恩恵を信じた。そして天國の戸の側に立つた。

罪人は天國の戸を叩き初めた。そして天國に入ることの許しを乞うた。

彼は戸の後ろで曰ふある聲をきいた。『天國の戸を叩くものは誰であるか。そしてその方は生きて居るうちに什麼ことをしたか』

告訴者の聲が答へた、そして此の人の凡ての罪を計へあげた。そして彼は何一つの善事をも名指さなかつた。

戸の後ろの聲が答へた。『罪人は天國に入ることが出来ない。そこを去れ！』

そこでその男は曰つた。『わが主よ！ 私はあなたの聲をきゝます。しかしあなたの御面を私は見ません、そしてあなたの名を私は知りません』

聲が答へた。『俺は使徒彼得だ』

罪人は曰つた『私を哀んで下さい。使徒彼得さま、そして人間の弱きと神の恩恵を覚えて下さい。あなたはキリストさまの御弟子ではありませんか。あなたはキリストさまのあのみ唇からの教訓をそのまゝお聞きになりませんか。そしてキリスト様の模範を御覽になりませんでしたか。そして思ひ起して下さい——キリストさまが靈魂の苦しみと憐みとをお受けになつて居らした時、そしてあなたに、眠らないで祈つて居てくれと御願ひになつた時、あなたはあなたの眼が重くてお眠りになり、キリストさまが三度あなたの御眠りになつて居るのを御覽になつたことを。そして丁度私もそれだつたのです。』

『そしてまた思ひ出して下さい。鶏が啼いて、そしてあなたがそこを去つてひどく御泣きになつたて云ふことを。私も丁度それだつたのです。そしてあなたは私を入れて下さることは出来ない』

すると、天國の戸の後の聲はだまつてしまつた。

それからそんなに長い間しないうちに罪人はまた戸を叩き初めた、そして天國に入ることを許さんことを乞うた。

他の聲が戸の後ろから語るのがきこえた。その聲は曰ふ。「これは誰だ。そしてどんな風の生活を彼はあの世で送つて来たか」

するとまた告訴者の聲が答へた。そしてその罪人の凡ての悪行を計へたて、よい事は少しも云はなかつた。

戸の後ろの聲が答へた。「そこを去れ。そんな罪人は天國で吾々と一緒に住むことは出来ない」

罪人はまた曰つた「わが主よ！ 私はあなたのみ聲をきゝます、しかしあなたのみ面を私は見ません、また、あなたの名をも知りません」

聲は彼に曰つた「俺は預言者のダビデ王だ」

だが罪人は絶望しなかつた、そして天國の戸から去らなかつた。そして曰ひ初めた。「私を哀れむで下さい。ダビデ王さま。そして人間の弱さと神の恩恵とを覚えて下さい。神はあなたを愛し給ひました。そして人民の眼の前に高く擧げ給ひました。一切のものはあなたのものでした——統治、光榮、富、妻妾たち、子たち。ところがあなたはあなたの高樓たかどおの屋根の上からある貧しき人の妻を見ました。そして罪があなたのうち目ざめました。さうしてあなたはウリアの妻をお奪ひになり、ウリアをばアモナイツ人の劍でもつて殺させました。あなたは、富める人であるあなたは、貧乏人からその最後の小さな小羊を奪ひました、そしてその貧乏人そのものを殺しました。私もまた丁度それだつたのです。」

「そしてまた思ひ起して下さい。その後あなたが、悔改めてそして曰ひにな

つたことを。「私は私の過ちがわかつた。私の罪は何時も私の前に在る。」と。それがまさしく私にもあつたことです。そしてあなたは私を入れては下されないのです」

すると戸の後の聲はしづまつた。

しばらくたつてまた彼は戸を叩き初めた、そして天國に入るのを許されん事を乞ひ初めた。二度また聲がきこえた。

「此の人は誰だ。そして彼は如何にあの世で生きて來たか」

告訴者の聲は三度答へた。そしてその人の一切の悪行をまた數え立てた。そして善行は少しも名指さなかつた。するとまた、戸の後からその聲が答へた。

「こゝを去れ、罪人は天國に入ることは出來ない」

罪人は答へた。「あなたの聲はきこえます。しかしあなたのみ面はわかりませ

ん。またお名前もわかりません」

聲は答へた。「俺は聖約翰だ。耶蘇の愛した弟子だ」

罪人は喜むだ、そして曰つた。「あなたは私を入れるのを拒むことは出來ません。彼得さまやダビデ王様は人間の弱いのと神さまのみ恵みとを知つて居なされるから私を入れて下さるかも知れなかつたのですが、あなたは非常に愛に深い方ですから私を入れて下さるでせう。あなたは、お、聖き約翰さま、あなたにはあなたの本のうちに、神は愛である、そして愛しないものは神を知らないと御書きになりませんでしたか。あなたがお年をとり遊ばした時、此の一言を人々にお曰ひになりませんでしたか。「兄弟よ、互に愛せよ」と。それなら何うして今になつてからあなたは私を憎み初め、そして私を追つ放ふことが出來ますか。あなたが自ら御曰ひになつたことを拒むか、私を天國に入れて下さるか。

どうかでなけりやなりますまう』  
すると天國の戸は開かれた。そして約翰は悔悟せる罪人を抱いて、彼を天國に入らしめた。

## 憎みは甘い然し神は強い

昔善良な主人が住んで居た。彼は物持ちであつた。そして澤山の奴隷が彼に仕へて居た。其奴隷達は彼等の主人を讃えてゐた。

「世の中に吾々の主人程好い主人は無い、彼は吾々に食物や着物を充分にし、そして吾々の力相當に働かせる。彼は口小言を言つたり、ブツ／＼言つたりしない。彼は自分達の奴隷を苦しめたり、家畜よりもひどく扱つたり、または過

失をしてもしないでも罰したり、親切なこと一言いつた事のない他の主人達とは違ふ。吾々の主人は、吾々の幸福を氣にかけて、親切にしてくれる、そして吾々とよく談しを爲る、吾々は是以上の好い生活をする必要がない。』

憊ういふ風に奴隷達は自分達の主人を賞めた。

そして悪魔は奴隷達が憊んなに幸福に住み、主人に對して愛に充ちた親切な心で暮してゐたのを怒つた、そして此主人の奴隷の一人のアレブといふのにとついた、そして彼に他の奴隷を怒らせる様に命令した。

他の奴隷は自分等の仕事を憊んで、主人を賞めてゐた、アレブも又大きな聲を上げて言つた。

「兄弟、君等は無暗に吾々の主人の好い事を賞めるが、悪魔を喜ばせて、試して見給へ。さうすりや悪魔は君等に親切を爲るだらう。吾々は主人によく仕へ

る。そして色々な事で彼を喜ばせる。何を彼が吾々にさうとして居やうとも吾々は先づ彼の心持を察する。だから何うして彼は吾々に親切にしないでゐられるか。しかしちよつと喜ばせる事を止して、彼に不親切にして見給へ、彼も亦他の主人と同じだと云ふ事が解るから。いや、悪い主人が爲るよりも、もつとひどく、悪に報いるに悪を以つて爲ると云ふことが解るだらう。』

他の奴隷達はアレブと論じはじめた、彼等はお互に口論して、賭をした、そして彼は善良な主人を怒らせる約束をした。彼は憊ういふ風にして約束をしたそれは、もし彼が主人を怒らせなかつたら、自分の祭りの着物をかける、併し彼が主人を怒らせたら、各自から祭りの着物をとる。其上、皆は主人に彼を詫びてやり、もし彼が鐵の鎖で縛られたり、牢に入れられたりしたら、のがしてやる事を約束をした。憊ういふ風に賭をして、アレブは翌朝主人を怒らせる

約束をした。

アレブは羊の檻の中で非常に價の高い種羊の世話をした。そして見よ！其朝、その親切な主人が客と一所に羊の檻に来て、彼の可愛つて居る價値のある牡羊を見せしめた時に、悪魔の労働者は、自分の仲間に合圖をした。

『サア、御覽、俺はその場で主人を怒らせて見せるから』

奴隷は皆集まつた、彼等は戸の隙間や垣根越しに覗いた。そして悪魔は木に登つて、自分の下僕が、どんな風にするかを見様とそこから庭を見下した。

主人は庭にやつて来て、客に綿羊と牡羊とを見せた。そして彼の最も良い牡羊を客に見せたかつた。

『他の牡羊も好いんですが』と彼は曰つた。『併し是は強い角を持つて居る奴で、馬鹿に高價なんです。で、私にとつちや自分の眼よりも貴いと云ふところ

です。』

綿羊や山羊は人がやつて来たので庭にかけ込んで来た。そして客は彼等の中にその價値のある牡羊を見分ける事が出来なかつた。牡羊が靜に佇むや否や、悪魔の労働者は恰も何うかした機みでもある様に、不意に羊を驚かした。で復彼等はみんな混つてしまつた。客はその牡羊を見分ける事が出来なかつた。非常に善い主人も困つて来た。

『アレブ、親愛な友』と彼は曰つた。『是を御覽、あの強い角のある一番いゝ牡羊を氣をつけて捕へて、しかと持つて居てくれ』

主人がかう言ふや否や、アレブは綿羊や山羊の中へ獅子の様に飛び込んで、その高價な牡羊の挟み剪られてゐる毛のところを掴んだ、彼はその挟み剪られてゐる毛のところを掴み、直ぐ片手で其左の後脚を掴んでさし上げた、そして

主人の眞前で其足を上方にひどく引張つた、するとそれは若い菩提樹の皮の剝けた枝の様にさけた、アレブは膝の下でその好い牡の足を拂つた。牡羊はなき出して前膝で倒れた。アレブはその右脚を掴んで左脚を内側へ廻し、そして短かいムチの様に吊下げた。客も他の奴隷も呻いた。そして悪魔はアレブがどんなに上手にその仕事をしたかを見て喜んだ。主人の顔は夜の様に暗くなつた。彼は眉を顰め、頭を下げて一言も言は無かつた。客も他の奴隷も黙つて居た。皆は何事が起るか見様とした。主人は暫時黙つて居た、それから何か振り捨てたいかの様に體を揺つて頭を上げた。そして眼を天にむけた。と直ぐ、皺は彼の顔から消えてしまつた。そして微笑んでアレブに眼を向けた、彼はアレブを見て、微笑んでそして言つた。

「おゝアレブ、お前の主は私を怒らせる様にお前に命じた、併し私の主はあ

前のより強い、そしてお前は私を怒らせなかつた。反つて私はお前の主を怒らせた。お前は私がお前を罪する事を恐れてゐる。そして又お前は自由を欲してゐる、アレブ。私はお前を罪しはしない、しかしお前は自由を欲するから、これ此通り、私の客の前で、私はお前を自由にするから、自分の思ふ通りにするがよい。お前はどこへでも自分の行き度い所へ行くがよい。祭りの着物を持つて。」

そして善良な主人は客と共に家に歸つた。悪魔は齒軋りした。そして木からすべり下りて土の中へ消えてしまつた。

大正六年二月十日印刷  
大正六年二月十三日發行

【定價金參拾錢】

一般叢書  
第一卷  
奧付

不許複製

譯者 加藤 一夫

發行者 東京市麴町區平河町五丁目三十六番地  
河本 龜之助

印刷者 東京市麴町區筆町二十番地  
河本 俊三

印刷所 東京市麴町區麴町二丁目九番地  
洛陽堂印刷所

發行所

電話番町四二五八番  
振替東京二〇九一四

東京市麴町區  
洛陽堂  
平河町五丁目



トルストイ原著 塚本 弘譯

### トルストイ民話集

四六版布製美装箱入  
定價壹圓貳拾錢  
送料六錢

トルストイ翁に學ぶのに翁の論文や小説からするものは譬へば翁を訪ぬるに玄關からする如きもので、其所に出て來る翁の姿は如何にも嚴正で其の言ふ所は餘りに高遠である、翁の民話から翁の思想人格を覗ふものは譬へば露臺の夕明りの中で茶談に耽る翁に待する如きもので、不用意の間却つて翁の眞面目を捕ふる事が出來る今や西洋的文明の一轉期に際會し、東洋の偉人トルストイ翁の思想に參ぜんとするものに多きを加ふ、翁のより端的なる一面を知るによき此好著を大方の士人に勧む。譯者は淳朴なる翁の一信者である。

### 發行所

東京市麴町區平河町五丁目三六  
振替口座東京二〇九一四番

### 洛陽堂

上澤謙二著

### 耶蘇傳

四六判三百六十頁餘  
美装箱入挿畫十枚  
定價一圓五十錢  
送料八錢

是れ『眞實の耶蘇』にあこがれ渡りし一人が只管此の一道に没頭して得たる所を正直に開陳したるもの。教理の光と傳説の雲深き所に封じ了られんとする『彼』を、血と涙と努力の現實の世界に取戻さんとしたるもの也。著者年齒未だ若く、其立場は極めて自由にして、何等妥協を知らず、束縛に累せられず、直に耶蘇の心胸に迫りて其真相を闡揚し來る。

全篇悉く是れ敬虔と大膽の奇異なる交錯、冷頭と熱腸のいみじき結合なり。眞實の耶蘇を求むる現代の人々に一脈の共鳴、一個の解決を與ふるものあるを信じて疑はざる也。

東京帝國大學  
醫科大學教授

醫學博士永井潜先生著

(五版出來)

改 版  
增 補  
内 容 一 新

# 生 命 論

菊判六百頁餘挿畫四十  
九枚純白布製天金箱入  
價參圓八拾錢稅拾六錢

生命に關する思想變遷の歷程を釋ね。最新自然科学の見地より生活現象に向ひて明晰なる解釋を下し、殊に實驗遺傳學說の如きは叙説の巧妙ながら掌を指すが如く、而して之に附するに、生命人造論として世界に喧傳せしシエフアー氏論文を以てし、錦上花を添ふるの感あらしめし生命論は今や版を新たにするに當りて、更に幾朶の花を加へたり。曰く膠質化學と生活現象曰く原素の循環と空中窒素の利用曰く營養の真相と食物の人造曰く觸媒作用と醱酵素就中防禦醱酵素と妊孕及び病の血清診斷の如き人間に於ける遺傳と人種改善學の如き、一は醫學界に於ける一新生面を開拓して近世學境の耳目を驚かし、一は永遠の福祉を人生に齎すべき一大使命を帯びて新たな活動を始め、天下經世有識の士をして齊しく思を致さしむるもの、斯くて六百頁餘の彪然たる大冊子一度巻を繰れば讀了せずんば止まざらしむ。尙序文に於て著者は『生命論』反駁者を反駁し、且つ終に詳細なる索引を附せり。

發行所

東京市麹町區平河町五丁目卅六番地  
振替貯金口座番號東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町  
四二五八

東京帝國大學  
醫科大學教授

醫學博士 永井潜先生新著

再 版  
發 賣

# 生物學と哲學との境

菊判七百頁純白總  
布製天金美裝箱入  
金價參圓八拾錢  
送料金拾六錢

科學の嶺と、哲學の峰と、聳え峙つ其の間の深い谷底に、碧の如き生命の泉が溢えて居る。其處に『物』と『心』が神秘の影を映して居る。『人』と『自然』が樂しき踊を舞て居る『主觀』と『客觀』が温き握手をして、最も崇く最も大なる天啓に耳を傾けて居る。而かも科學の嶺に得々たるものも、哲學の峰に超然たるものも、到底此の天地の大觀に接することは出来ぬ。之れに接することの出来るのは、嶺より峰に向ふ聖智の人、峰より嶺に進む圓覺の士でなければならぬ。曩に『生命論』を公にして、洛陽の紙價を貴かゝらしめ『醫學と哲學』を出して、斯界を驚嘆せしめたる著者は今此の大觀を捉げ來りて讀者に説明せんと努力して居る或は生命研究の眞諦を論じ或は知識生活の第一歩を説き、或は心身の影響を叙し或は兩性相關の妙趣を述べ或は自然死の研究に入る。材は人を得て其光彩を放ち、人は材を待て其妙腕を揮つて居る。思を自然と人生とに馳せつゝある天下有識の士は、此の書を繕いて必ずや莞爾たる者あらう。

發行所

東京市麹町區平河町五丁目  
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町  
四二五八

畔上賢造著

## 悲哀より歡喜まで

四六判布製箱入

定價 九十錢

送料 八錢

これ著者が信仰の告白である。十二年間の心靈的實驗を記せるものである。著者少にして哀愁の囚ふる處となりてより眞理と光明の探究に從て科學、文藝、哲學等に於て之を發見する能はず、かの盛なる近代思想も著者を救はず、舊き基督教にも新しき基督教にも満足せず、遂に自らキリストの生命を採りて、其救済を實驗し以て歡喜法悅の境に入つた。此の生きたる實驗を語るものが本書である。惱める人に基督の救済を示して心靈の飢渴を醫し根本的の安心を與へんとは著者の願である。

トルストイ著 加藤一夫譯

## 我等何を信ずべき乎

四六判五百頁餘

布製函入

定價 一圓五十錢

送料 十二錢

自分は此譯を出さざるを得なかつた故に出すのである。曩きに「我等何を爲すべき乎」を讀んだ讀者はトルストイをして斯る思想や生活に到達するに至つた其根源を知らねばならぬやうである、げに我等何を爲すべき乎に表はれたるトルストイの偉大は彼が此書に於て表白したるが如き、誠實深刻なる彼の宗教彼の信仰によるのであつて、こは實にトルストイをして偉大たらしめた最初の方である。收むる所『我宗教』及び『宗教とは何ぞや』の二書にして一つは彼の宗教を知るに足り他は彼の宗教觀を窺ふに足る、トルストイの力と人格と偉大とを酌まんと欲するものは先づ此の書に來らねばならぬ、基督者は其一切の被せ物を除かれたる眞基督教を知り其他の者は眞宗教を得るであらう。

トルストイ原著 加藤一夫譯 (再版)

## 我等何を爲すべき乎

四六判六百頁餘  
クローズ製函入  
定價一圓六十錢  
送料 十二錢

若し『我懺悔』がトルストイが永遠的生命の苦悶と憧憬であるならば『吾等何を爲すべき乎』は彼の人類的生命の良心的苦悶と其の解脱とである。トルストイの偉大は單にその文學的表現の上に於てはも古今獨歩であるが、更に偉大にして更に深刻なる彼の價值は、その永遠的及人類的苦悶と憧憬との中に於ける彼の不可抗の促迫力でなければならぬ。何人か彼の深甚なる苦悶の叫びや喘ぎの聲に敬虔の至情と靈感の涙なくして對し得よう。『我懺悔』に於ては巢より落されし雛鳥の悲しみである。『吾等何を爲すべき乎』に於ては誤れる自己の生活の眞狀を見せつけられた驚愕と雄々しい自己革命の大願發起である。寔にこれ萬人の書にして人類最高の福音たり蓋し惱める現代に對する唯一最高の贈物たる可きを信す。

海老名彈正序 帆足理一郎著 (再版)

## 宗教と人生

四六判 五百頁  
布製箱入  
定價一圓卅錢  
送料 八錢

古き宗教は廢れ、古き藝術は毀たれ、古き哲學は破産して今や道義の根柢危機に瀕せり。社會は尙階級の傳習に囚はれ、少數は多數を壓倒し、個人は徒に個我の權威を絶叫して赤裸々の野獸性を暴露し過てる自然主義、本能主義、生命主義に青年の心血を腐らし、刹那的感衝的朝三暮四の生涯を以て自己創造と誇稱し、自我實現と迷想し、而も精神生活の貧弱寂寞訴ふるに由なからんとす。著者は多年シカゴ大學大学院に宗教哲學を専攻し同大學神學科長マシュー博士より『大秀才』と稱せらる。多年人生の波瀾に處して内的奮闘の生活に血と涙の谷を潜りし著者か其清新なる思想の綠光と敬虔なる信仰の白熱とは相俟つて讀者の心胸に一味の靈光の閃きを傳へん。

露國ソロウイヨフ原著 關竹三郎譯

# 神 人 論

四六判三百頁餘  
布製箱入  
定價一圓二十錢  
送料八錢

本書の原著者は露國近代隨一の哲學者にして、トルストイと並び立てられたる露國思想界の二大柱なり。彼の哲學は深く宇宙實在の根本義に觸れ、本源的生命の實相と其の表象とを語ることに於て遙にオイケン、ベルグソンに勝るものあり、今や全歐洲に認められ、彼の深遠なる哲學は枯渴せる心靈に蘇生の力を與へつゝあり、譯者は熱心なるソロウイヨフの研究家、譯文は明快透徹正に之れ最近本邦思想界最大の收穫たらん。

醫學博士  
文學博士

富士川游著

# 金 剛 心

四六判全一冊  
定價五 十錢  
送料 四 錢

迷ふて行く所を知らざる凡夫に對して、眞實悲願の方向を示す。著者僧侶ならざるが故に、説く所却て因襲相承の弊を離れ欣求歸命の眞意を語り得るの便あり、淨土眞宗の安心の要訣を明にし、眞實に生きんと欲する人の宜しく一讀すべき書なり。

(容 内)  
○無佛無法○機の深信○佛と凡夫○業種と因縁○彌陀の誓願  
○安樂淨土○無碍光佛○慈悲の親○攝取不捨○一心歸命○如來の慈悲○佛凡一體○生佛不離○報恩謝德○現世の利益●附錄○淨土眞宗○四法建立○願力廻向○阿彌陀佛○六字名號○一心歸命○即得往生○淨土往生○報恩行業

醫學博士 永井潜序 兒玉昌著(再版)

## 滅び行く宇宙及人類

四六四頁 五十頁  
布製箱入  
アート紙挿畫廿枚入  
定價 一圓四十錢  
送料 八錢

萬物は日夜流れて愁人の爲めに暫くも止まらず、流れに浮ぶ泡沫は且つ消え且つ結びて將に何れに歸せんとはする。宗教迷多くして此の疑を解く能はず、哲學光薄くして未だ此の真相を穿ち得ず。著者思を茲に潜むる事多年、今や一點螢火の如き科學の灯を掲げて此萬有の流れの末を探らんとす。上は日月星辰より下はアメーバ体内の現象に及び、全篇を貫くに勢力分散の原理に基づく佛教の寂滅思想を以てす。世の惱める者、迷へる者、冀くは本書に依つて始めて宇宙の目的人生の歸趣を明にするを得んか。

289  
179





終

